

精神世界の再考察

伊藤耕一郎

はじめに

1 日本の宗教の現状

日本人の宗教人口は年々減少している。図表 1 (文末に掲載)で見ると、既存宗教のみならず新宗教でも巨大教団の信者数減少は著しい。

しかし教団単位で見れば、GLA や真如苑などのいわゆる「新新宗教」¹と呼ばれる宗教の一部には、大幅に教勢を伸ばしているものが存在する。

GLA は信者数だけで見ると小さな教団である。しかし信者数は 2006 年で 2 万 6 千人²、2013 年では 4 万人³になっており (GLA の WEB サイトによる 2017 年の公称は 4 万 2437 人⁴)、10 年で倍近く信者を増やしている。

1 「新新宗教」とは西山茂が「大教団化した新宗教が社会的適応をとげるさいに、重荷に感じて棄て去った遺物をあえてひろいあげることによって、小規模ながら最近急速に教勢を伸長させている新宗教」として提唱し(井上順「<新新宗教>概念の学術的有効性について」『宗教と社会』3(0)、1997年、4頁)、島菌は「神秘現象と心身変容への関心の増大」など旧「新宗教」との相違点を7点あげている(塚田穂高「運動の発生と展望の現在:<新新宗教>論の再検討を通じて」『宗教研究』89巻 Suppl号、2015年、115頁)。また島菌は新新宗教について「隔離型」、「中間型」、「個人参加型」と3つのタイプに分類しているが(『ポストモダンの新宗教』東京堂、2001年)、島菌自身が「隔離型」については社会との間に壁がある、また「個人参加型=新霊性主義」(『現代救済宗教論』青弓社、1992年)としていること、また最近の研究においてはこの3分類を使用していないことから、本稿において「新新宗教」と記した場合には島菌が示した中間型、「共同体を作っている」教団を示す。

2 渡邊典子「『心理学主義化』する新新宗教の教説— GLA を事例に」『一神教世界』2号、2011年。

3 公益財団法人 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター調べ。

4 GLA では会員制をとっており、会員は月会費(月 1000 円)を支払う。会費が滞れば自動的に信者でなくなるため教団からの教勢報告はある程度信用できる(GLA 総合本部出版局『はじめての GLA ガイド』第 2 版、2017 年)。

真如苑は教団の運営状態をリセットし、信者数の精査をはじめ、2012 年からは信者に IC カードを所持させるなどの改革を行った。これによって公称 200 万人を超えた信者数は一時的には 67 万人に減少した。しかし、現在において同教団の信者数は再び上昇カーブを描き、2019 年頃には 100 万人を超える見通しである⁵。

2 精神世界の興隆

1970 年代からはじまった「精神世界」⁶とよばれる現象は、江原啓之の登場により「スピリチュアル」の名称でブームとなった⁷。このブームの中心はブース出展型のイベントで⁸、「癒しフェア東京」、「癒しフェア大阪」、「癒しスタジアム in 大阪」、「癒しスタジアム in 神戸」などがある。動員数を見ると癒しフェア東京では、2005 年が 2 万 4994 人、2016 年では 3 万 2084 人で、後発の癒しスタジアム大阪は 2005 年のイベント開始時には 78 人であった動員数が 2016 年には 1164 人にまで増加している⁹。

5 「蘇る宗教 真如苑の明暗③」『サンデー毎日』毎日新聞社、2017 年 2 月 19 日号、155 頁~156 頁。

6 1970 年頃より使われ始めた言葉で、日常性や合理性からの超越や神秘領域、癒しをテーマにするが宗教であることを否定する現象などを指す(島蘭進『精神世界のゆくえ』秋山書店、2007 年、4 頁)。

7 島蘭進『スピリチュアリティの興隆』岩波書店、2007 年、33 頁。

8 これまでは「スピコン」、「スピマ」をもってスピリチュアル系のイベントの中心としてきたが、スピコンの後を継いだスピマは学術調査もジャーナリストの取材も受け付けず、一部の公認記事のみの掲載を許可するなど、公正な調査ができないために現地対象調査から外した(日刊カルト新聞「スピリチュアル・マーケットー正しいメディアの見分け方」2010 年 10 月 18 日)。また同イベント自体も 2017 年に終了している。

9 「癒しフェア東京」については、公式 WEB ページ、閲覧日 2017 年 8 月 22 日、<http://a-advice.com/>。「癒しスタジアム in 大阪」については 公式 WEB ページ、閲覧日 2017 年 8 月 22 日、<http://www.balance.join-us.jp/iyasisutajiamuooosaka.html>。「癒しスタジアム in 神戸」については、公式 WEB ページ、閲覧日 2017 年 8 月 22 日、<http://www.balance.join-us.jp/iskobehp.html>。「癒しフェア過去の開催実績」については、公式 WEB ページ、閲覧日 2017 年 8 月 22 日、<http://a-advice.com/past>。「癒しスタジアム in 大阪の開催実績」については、公式 WEB ページ閲覧日 2017 年 8 月 22 日、<http://www.balance.join-us.jp/iyasisutajiamuooosaka.html>。

3 精神世界の受容

精神世界は従来「宗教」がほとんど一手に引き受けていたような人間の営為、関心を引き継ぐように成り立っており、宗教において核心的な関心事であった「超越的なもの」、「聖なるもの」、「見えない次元や力」、「霊的なものとの繋がり」が当然のように組み込まれている¹⁰。また既存の制度を持つ「宗教の本質にあるもの」だとされることもある¹¹。

トランスパーソナル心理学では（精神世界と同じ現象について）**Spiritual Emargency (Spiritual Emargence)** の概念が提示されている。堀江は宗教心理学の立場から「気功・レイキ・ホロトロピックセミナー・フォーカシング」といった精神世界に通じる療法について、これらを「心理学的宗教運動」だとしている。また弓山は、これを「個人的な宗教意識」と定義づけている¹²。

4 精神世界からみた宗教観

このような中で島藪は「精神世界の人々がイメージしている宗教」を下記の4つに分類している（島藪進『精神世界のゆくえ』、289頁~290頁）。

10 林貴啓『問いとしてのスピリチュアリティ』京都大学学術出版会、2011年、57頁~58頁。

11 堀江宗正『スピリチュアリティのゆくえ』岩波書店、2011年、4頁。

12 次を参照 スタニスラフ・グロフ、クリスティーナ・グロフ(共著)『スピリチュアル・エマージェンシー』(共訳)高岡よし子、大口康子、春秋社、1999年、10頁。岡野守也『トランスパーソナル心理学』青土社、2000年、214頁、276頁~281頁。堀江宗正『歴史の中の宗教心理学』岩波書店、2009年、223頁~246頁。弓山達也「日本におけるスピリチュアル教育の可能性」『宗教研究』84巻2号、2010年、553頁。

精神世界側がイメージする宗教観

- ① 本来個々が行うべき宗教体験、神秘体験を歪め、真理は既に決定されているとし、啓示や教義の枠をはめ、個々人がそれに従い、信仰することを強制する。
- ② 「宗教」は人々に対して、カリスマ的指導者や教団組織のような一元的権威に依存服従し、自由な思考や実践を放棄するとともに弱者への差別を正当化したり集団外の人々を敵対視するよう促す。
- ③ 「宗教」は人間だけを超越者に接近できるものだとして特権化し、他の自然的存在を価値のないものとして軽んじ、人間による自然の支配や搾取を正当化し、自然との調和的交流を妨げる。
- ④ 「宗教」は人間の悪や苦しみを強調して諦めの姿勢を強い、ありもしない(あるかどうかわからない)救いなるものを約束して偽りの満足を与えて、人々を「ほんものの自己」や本来的な生の喜びから遠ざける。

この分類とは別に新新宗教について島藪は、精神世界と共通点が存在することから、「現在教勢を伸ばしている『新新宗教』と『精神世界』には多くの接点があり『精神世界から新新宗教へ』、『新新宗教から精神世界へ』という道をたどった経験のある人の数はかなりの数いるだろう」とも述べている(島藪進『精神世界のゆくえ』、19頁)。

一方、伝統宗教については「(精神世界側の人々にとっては) 伝統的な宗教は人々に自己放棄を迫り、知的思考を止め、超越者に権威をゆだね、集団や指導者に依存しているもの」と受け止められており、精神世界側から受け入れ難い存在だろうとしている¹³。精神世界は新新宗教とは接点があるが、既存宗教とは歩み寄ることはできない、宗教と精神世界は似てはいるが、事実上乖離したものであると一旦ここで結論づけられたと見て良いのかもしれない。

しかしこれは本当だろうか、精神世界と宗教は乖離しているのだろうか。本稿ではこれまでの精神世界の成立背景を踏まえ、現地調査結果とあわせて検証を行っていくことにする。

第1章 「精神世界」とは

1 「精神世界」という現象

13 島藪進『精神世界のゆくえ』、19頁。島藪進「ニューエイジ系宗教」、山折哲雄 監修『宗教の事典』朝倉書店、2012年、476頁。

(1) 地域に広がる精神世界

企業が主宰する精神世界市場の他にも、個人が地域で開催するイベントも参加人数を増やしている。三重県で行われている「お陽さまマルシェ&にじいろマーケット」は主宰者個人が自分の休みを利用して開催し、月に1度のペースで平日に開催されており、毎回500人前後の動員がある。2017年6月17日の土曜日開催には3588人が集まり「会場の駐車場の数が足りない」ほどの動員数を記録した¹⁴。

地域でも新しい試みとして、2017年9月18日には「滋賀県近江市の蒲生岡本自治会・蒲生地区まちづくり協議会」と精神世界イベントを運営する「めぐる月の祭典実行委員会」が協力し、地域との合同イベントが行われている。

(2) 低迷期と精神世界の特殊性

精神世界は順調に成長してきたわけではない。2006年に発生した、生まれ変わりを信じた中学生の自殺事件(9頁参照)、2006年~2007年にかけての総合雑誌における喧しいほどの論議や、全国霊感商法対策弁護士連絡会による民放連やテレビ局各局に対するオカルト番組の検討の申し入れ¹⁵、「霊感商法を助長する」、「霊視の内容が事前に用意されていた」などの批判や、諸事情による江原の看板番組「国分太一・美輪明宏・江原啓之のオーラの泉」の打ち切りなど、2009年頃にはブームは終焉に向かうと思われた¹⁶。しかし上述の通り精神世界のマーケットは拡大をつづけ、形を変えつつもそのブームを維持している。

島菌は精神世界について、日本だけの特殊な現象ではなく、先進国世界各地で広がっている現象であり、ニューエイジと重なり合うところは多いが互いに固有のものを含みあった類似現象だとその特殊性を指摘している¹⁷。

14 「お陽さまマルシェ&にじいろマーケット」公式 WEB、閲覧日 2017 年 6 月 3 日、<https://sun-marche.jimdo.com/>。2017 年 6 月 23 日、同イベント主宰者 K より聞き取り。

15 櫻井義秀『カルトとスピリチュアリティ』ミネルヴァ書房、2009 年、254 頁~255 頁。

16 「スピリチュアルブーム終焉か？オーラの泉打ち切り決定！」日刊サイゾー 2009 年 2 月 19 日号、閲覧日 2018 年 1 月 5 日、http://www.cyzo.com/2009/02/post_1576_entry.html。

17 次を参照。島菌進『精神世界のゆくえ』、19 頁~20 頁。伊藤雅之「ニューエイジと精神世界：概念的整理を中心として(Ⅲ「精神世界」概念について考える、ワークショップ(1))「精神世界」の構図・現代社会と現代人の意識を理解する手がかりとして」『宗教と社会』3 巻 Suppl 号、1998 年、22 頁、28 頁。島菌進『スピリチュアリティの

2 「精神世界」という用語

「精神世界」という言葉が使われ始めたのは 1970 年代で (島藺進『精神世界のゆくえ』、12 頁~13 頁)、2000 年頃までは出版物のタイトルにも「精神世界」と付いたものが多かったが、1990 年代後半頃から徐々に「スピリチュアリティ」という言葉が使われるようになった¹⁸。また「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原のメディア露出によって 2005 年頃から精神世界は一般的に「スピリチュアル」と呼ばれることが多くなった¹⁹。

現状では、「スピリチュアリティ」、「スピリチュアル」、「スピリチュアリズム」という派生語や関連した語がいくつもの意味や事象を指すことがあり²⁰、本稿では混乱を避けるためにこの現象に対しては「精神世界」という語を用いることにする。

3 精神世界の範囲

(1) 精神世界の 2 面性

「精神世界」をひとつの枠で語るのは非常に難しい。上田弓子は精神世界の扱い

興隆』、46 頁。

18 1999 年版の精神世界関連書籍を紹介するカタログには 1 万 588 冊もの書籍が収録されている (ブッククラブ回 編『精神世界カタログ 2000—専門書店が選んだ心と人と世界をめぐる本』すずさわ書店、1995 年)。島藺進「心霊性運動=文化」、星野秀紀・池上良正・氣多雅子・島藺進・鶴岡賀雄編『宗教学事典』丸善、2010 年、598 頁~599 頁。

19 テレビ番組「国分太一・美輪明宏・江原啓之のオーラの泉」から江原の知名度とスピリチュアルという言葉が一般的になったことは確かだが、これと 2000 年代初に使用されはじめたスピリチュアリティの出自は別である (島藺進『スピリチュアリティの興隆』、32 頁~33 頁)。

20 一例としては苦米地は『『スピリチュアル』と『スピリチュアリズム』は同じものであり、スピリチュアルの本質は心霊主義や霊媒主義だ』と非難をしているが (苦米地英人『スピリチュアリズム』にんげん出版、2007 年、40 頁~41 頁)「スピリチュアル」という言葉に「心霊主義・霊媒主義」の意味はない。また柏木哲夫の医療現場でのスピリチュアルケア、田中美津の自己解放のスピリチュアリティ (島藺進『スピリチュアリティの興隆』、32 頁~33 頁) なども本研究の指す「精神世界」とは別のものである。

は下記の 2 つに大別されるとしている²¹。

- ① 現代日本人の感性がどこに向かうのかを見るための糸口としての「社会的現象」。
- ② 収益を生み出すツールにもなり得る個人的な実践的かつ「実用的なカルチャー」。

上田は、精神世界は難解な制度的宗教の教義にとって変わり、人々の意識は「気づきや学び」へと移行しつつあると指摘する²²。また精神世界を、宗教の一種だとして限定することはその柔軟性や幅広さからかけ離れたものになってしまうと精神世界を広義の宗教として扱うことに対しても難色を示し、精神世界と宗教とは分離して考えるべきだとしている²³。

精神世界は、制度的な宗教を離れても（先祖祭祀など一定の）宗教性を保持している現代の日本人社会について、答えの 1 つを提供しているし、これまでに表現することができなかった個人的な文化意識の表現ツールとして捉えることもできる²⁴。

しかしこの両者は別々に分けて扱うべきものではない。精神世界は個人的な自己実現や実践的な文化的側面を含有しつつも、「神智学」、「ニューソート」、「スピリチュアリズム」などの社会的な思想背景の上に成り立っている現象でもあるからである。

(2) 新靈性運動と精神世界

これらを含めて 1 つの枠組みで語る概念が「新靈性運動」である。島菌は 1970 年代～90 年代後半までの「精神世界」という語について「イーミックな呼び方であり、ニューエイジ同様に漠然とした言葉である」とし、学術用語として「新靈性運動」と名付け、ニューエイジや精神世界の影響がみられる一部の新新宗教も含む 1 つの運動（文化）だとした（図表 2）²⁵。

21 上田弓子「現代日本におけるスピリチュアリティについての一考察」『教養デザイン研究論集』第 6 号、2014 年、58 頁。

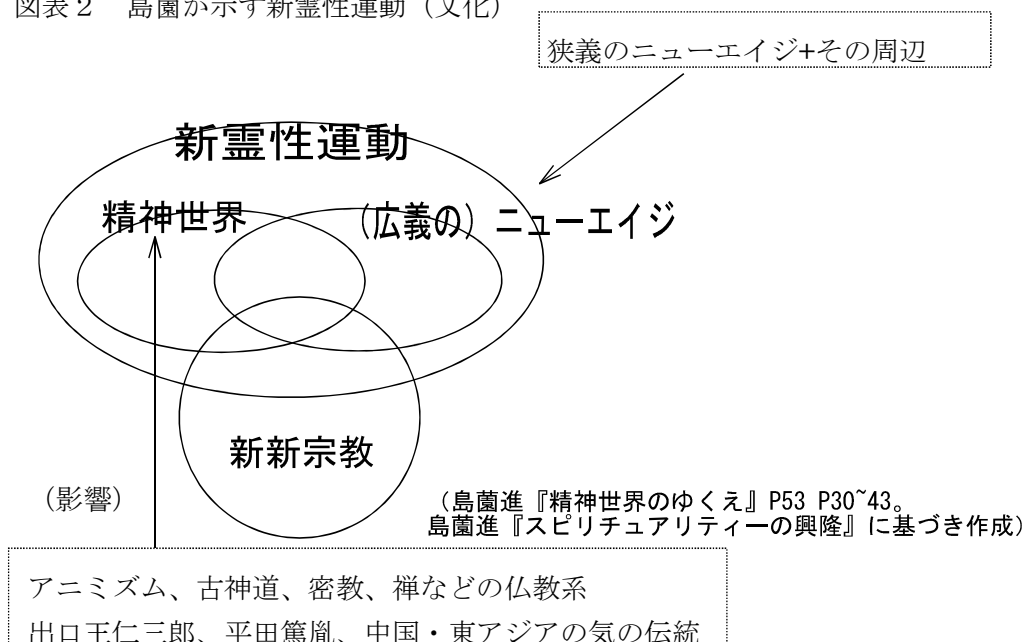
22 同上 61 頁。

23 同上 63 頁。

24 X（女性）は「光のアート」として天使から告げられたイメージ画を描いてセラピーを行っているが、同時に現代美術のアーティストとしても活動をしている。精神世界イベント「マッチングフェア」会場にて聞き取り（2016 年 11 月 9 日）。

25 島菌進『精神世界のゆくえ』、47 頁～48 頁。島菌は欧米の新靈性運動の系譜として「スウェーデンボルグ主義」、「メスマリズム」、「超越主義」、「スピリチュアリズム」、「神智学」、「ニューソート」をあげている（同上、53 頁～60 頁）。日本の精神世界の系譜（島菌進『精神世界のゆくえ』、60 頁～61 頁）。狭義のニューエイジは主として 1 自己実現、

図表 2 島菌が示す新霊性運動 (文化)



この運動について島菌は「個々人の『自己変容』や『霊性の覚醒』を目指すとともにそれが伝統的な文明やそれを支える宗教、あるいは近代科学と西洋文明を超える、新しい人類の意識段階を形成し、霊性を尊ぶ新しい人類の文明に後見する運動群である」と説明しており(島菌進『精神世界のゆくえ』、50頁~51頁)、社会現象、実践的行為を含む枠組みを提唱した。当然この中には上田が指摘した「収益を生み出すツール」という側面も含まれており、その面を取り出すとネガティブな批判があることは否定できない。この批判例は次項の通りである。

4 精神世界に対する主な批判²⁶

2 宇宙との一体化、3 神秘性の尊重、4 自己変容による宇宙自然の神聖化、5 死後の世界への関心、6 宗教・合理主義・霊性科学の統一、7 エコと女性原理の尊重、8 超常的感覚・能力、9 思考による現実変化、10 意識レベル上昇、11 意識レベル上昇は宇宙的進化の一コマ、12 輪廻転生とカルマの法則、13 地球外生命体の存在、14 過去の高度文明の存在、15 人体内のチャクラや霊的次元の存在、16 水晶・香・音・場所の神秘力、17 指導霊の存在、18 体外離脱や過去体験、19 チャネラーなどがあげられている(同上、30頁~34頁)。ニューエイジの周辺としては神智学協会、人智学協会、ラジニーシ運動、レイキ、気功、UFOなどがあげられている(同上、46頁~53頁)。

26 項目をまとめるにあたり次の文献及び聞き取りを使用した。香山リカ『スピリチュ

精神世界に対する批判はアカデミックなものからジャーナリストによるものまで幅広くあるが、項目ごとにそれぞれの主張を分類しなおした。

【宗教面について】

- ・ ハンドパワーのヒーリングなどは宗教の手かざしから宗教性を取り払っただけである。
- ・ 癒しという本来は救済宗教にしか使われなかった言葉を安易に使いブームを起こし本来の癒しの意味を分からなくさせてしまった。

【経済面について】

- ・ 波動の原理という精神世界共通の認識が波動測定器や波動矯正装置なる高価な商品を生み出し、マルチまがいの商法がはびこっている。
- ・ 疑似科学が精神世界マーケットへの勧誘に使われ、足を運びやすくしている。
- ・ 完全になることを求めるように仕向け、いつまでもセッションを受け続けさせる。
- ・ 無理矢理人生の意味を問い人生を見いだす努力をさせ、セッションを受け続けさせる。
- ・ 魂の永遠・輪廻転生・アセンションで悪い世界へ墜ちないように魂磨きを強要する。

【社会面について】

- ・ 精神世界市場に足を運び続けた結果、占いや霊媒などの依存症になり錯乱する。
- ・ サムシンググレート（宇宙意志・ワンネス）との直接の結びつきを求めた結果「個人主義」に陥る人々が増加する。
- ・ 全てのことは宇宙の導きと前向きに捉えようとしすぎて判断力が低下し、他人に迷惑をかけても気付かない。
- ・ 人との魂の優劣をいつも考え、差別的な思考を生み出している。

アルにハマる人、ハマらない人』幻冬舎新書、2006年。櫻井義秀『霊と金』新潮社、2009年。有本裕美子『スピリチュアル市場の研究』東洋経済新報社、2011年。長倉顕太『プチ教祖の秘密ーこの世に聞いたあの世の仕組みースピリチュアル商法』Kindle電子書籍、2015年。堀江宗正『スピリチュアリティのゆくえ』。苔米地英人『スピリチュアリズム』。「アンチ精神世界ブログ管理者 S」（2017年4月10日、4月11日聞き取り）。

【自己に対して】

- ・ 両親を決めたのも生まれてくることを決めたのも自分自身であると教えられるので、親から虐待されるのは自分を鍛えるために親を選んで生まれてきたと信じ、私さえ変わればいいのだと思ってしまう。被虐待児童の保護の遅れなどの社会的問題の発生。
- ・ 問題は社会ではなく自分であると思いつつもするのでそれで説明のつかないことは前世のせいにして、社会的に孤立していく。
- ・ 自分の主張は大宇宙から与えられたものだと思っているので人の話を最後まで聞けない
- ・ 価値観の多様性を認めず「全ては1つだ」と主張しつづける。
- ・ 肩こりも霊現象にするなど、あらゆる事を精神世界のできごとと関連づける。

【他人に対する態度について】

- ・ 癒しを求めてきた人に対して「魂磨き」を強要して追い詰める。
- ・ 自殺を考える程苦しんだ人に対して「転生待ちの魂を裏切る行為だ」と責める。
- ・ 身体に疾患が起こる＝霊性が高い＝魂のエリートなので障害に感謝しろという。
- ・ 相手がソウルメイト（前世からの魂の繋がりのある魂の双生児的存在）だと信じ、相手が嫌がっていてもつきまとう（ストーカー行為に発展することもある）。

—実際にあった事件として—²⁷

9日午前2時45分ごろ、埼玉県川越市通町の11階建てマンションの敷地内で、このマンションに住む同市立中2年の男子生徒（14）が倒れているのを主婦（50）が発見し通報した。男子生徒は外傷性ショックで死亡した。川越署は、男子生徒が10階の踊り場から飛び降りて自殺を図ったとみて動機などを調べている。

調べでは、男子生徒の部屋の机の上に遺書のようなメモがあった。霊界の話を紹介するテレビ番組を家族と見たことに触れて「絶対におれは生まれ変わる。もっとできる人間になってくる。家族のみんな忘れないでいて。必ず会いに来る。ホントにゴメン サヨナラ」と書かれていた。生徒はバスケットボール部に所属し、レギュラーを外されたことにショックを受けていた様子だったという。両親にいじめの相談をしたことはなく、8日も変わった様子はなかったという。

5 新霊性運動の意味

27 毎日新聞、東京夕刊 2006年12月9日、村上尊一の署名記事。

しかし島菌はこれらネガティブな面が「新霊性運動」の中に含まれていることを見越しており、次のように言っている。「このような消費者的な態度という点では新霊性運動（文化）は救済宗教以上に顕著である。新霊性運動においては、束縛的な教義や組織への従属をきらい、ゆるやかなネットワークがあるべき結合の形態とされている。しかし、実際には企業的な組織が、不特定多数の消費者に、情報や技術やサービスを販売するという形での普及が支配的である。新霊性運動が広められ、受容されるのは、なによりもまず、書物、雑誌、ビデオ等のメディアとともに、セミナー、ワークショップ、講座など、料金を支払って参加し、何かを取得するための場においてである」（島菌進『精神世界のゆくえ』、349 頁）。

また新霊性運動の役割についても「新霊性運動が全体としてどのような社会的機能をもつのか、現代社会の公共空間において新霊性運動が何らかの役割を果たすのかという問いにも深入りしていない（中略）評価する前に、現象そのものをよくみておきたい」（島菌進『スピリチュアリティの興隆』、311 頁）としている。

つまり新霊性運動は、それまで日本において漠然と「スピリチュアル」と呼ばれてきたものに対する枠組みを与え、明確化しようとするものであり、その中身の良否を問うものではないのである。あいまいな概念であったスピリチュアルに 2007 年の時点でようやく枠ができたのである。

6 新霊性運動の問題点

新霊性運動が広義のニューエイジ、昔から日本にあった呪術なども含む精神世界、そして新新宗教の一部を含む 1 つの思想の枠組みであることは図表 2 で示した通りである。しかし 2018 年現在において、図表 2 の新霊性運動の枠組みでは説明が出来ない部分があくつか出てきている。その 1 つがニューエイジ及びその周辺の問題である。

(1) 米国におけるニューエイジ

ニューエイジはそれまでの神秘思想や霊性運動である「チャネリング」、「リーディング」、「リインカーネーション」、「ヨガ」、「宗教多元主義」、「神智学」、「人智学」、「オシオームーブメント」などから様々な思想や技法を取り入れている²⁸。そのため明確に定義づけることが難しく、図表 2 でも「広義の」という前置きをせざるを得なかった。

堀江はニューエイジ発祥の地であるアメリカでは、ニューエイジという言葉を使

28 尾形守『ニューエイジムーブメントの危険性』プレイズ出版、1996 年、6 頁~9 頁。

うことが少なくなっており、2009 年の American Academy of Religion (アメリカ宗教学会) の発表題目ではニューエイジという言葉はほとんど使用されず、「スピリチュアリティ」という言葉に置き換わってきていると報告している。具体的には「仏教」、「瞑想」、「東洋宗教」というように「ニューエイジの中の(中略)具体的な思想への興味」という表現がされることが多く、これについて「ニューエイジという言葉よりもキリスト教の中で使用される『スピリチュアリティ』という言葉の方が通りが良いためだろう」と指摘している²⁹。

(2) 日本での知名度

「広義のニューエイジ」の中に含まれる様々な思想が日本の精神世界に影響を与えているのは確かだが、精神世界の関係者はこれらをニューエイジというひとくくりには受け取っていない。

「スピリチュアル界のドン」と呼ばれ、ブース出展型の「精神世界イベント」を創出した船井幸雄は日本の「精神世界市場」のパイオニアである³⁰。船井は自分が影響を受けた人物としてスウェーデンボルグ、エドガー・ケイシー、出口王仁三郎、高橋信次、スタニスラフ・グロフなどを挙げているが³²、ニューエイジに関しては「ニューエイジなどよく知らないし、全く意識していない」としている³³。

(3) 辞書類による検証

一般的な辞書や事典、宗教及び精神世界に関する主な解説書を調べたが³⁴、「チャ

29 堀江宗近「海外の動向 日英米のスピリチュアリティ 2009 年の調査から(1)」、『国際宗教研究所ニュースレター』第 67 号、2010 年、10 頁~11 頁。

30 船井は自分の戸籍の姓が船井でなく船井であることを 1998 年まで知らず、2013 年の後半の著作物からは「船井」の表記に変えている。しかし WEB や重出版物に関しては統一されておらず、本稿では船井幸雄に統一する(船井幸雄.com-船井勝仁執筆「船井幸雄の今一番知らせたこと」わが深宇宙探訪記 2013 年 12 月 16 日、閲覧日 2018 年 2 月 20 日)、http://www.funaiyukio.com/funa_ima/index.asp?dno=201312003)。

31 次を参照。本と雑誌のニュースサイト リテラ「スピリチュアルのカリスマ・船井幸雄が死の直前にスピを否定!?!」富士通、2014 年 10 月 15 日、閲覧日 2017 年 12 月 11 日、<http://lite-ra.com/2014/10/post-548.html>。櫻井義秀『カルトとスピリチュアリティ』、252 頁、273 頁。船井幸雄、佳川奈美(共著)『船井幸雄と佳川奈美の超☆幸福論』Kindle 版、ダイヤモンド社、2013 年、321/1850。

32 船井幸雄『人は生まれ変わる』ダイヤモンド社、2013 年、98 頁。

33 斉藤貴男『カルト資本主義』文春文庫、2000 年、296 頁。

34 参照した辞書、事典、解説書は次の通り『広辞苑 4 版』(岩波書店、1991 年)、『広

ネリング」、「ヒーリング」といった技法、「神智学」、「スピリチュアリズム」といった個別の思想は解説されているものの、ニューエイジという言葉について解説されているものはほとんどなく、一般的なものでは『知恵蔵 2007』(朝日新聞社、2007 年)、『現代用語の基礎知識』(自由国民社、2017 年)の 2 冊、宗教関係では『現代世界宗教事典』(悠書館、2009 年)の 1 冊、精神世界では『精神世界の教科書』(松村潔、アールズ出版、2012 年)の 1 冊しか記載がなかった。

(4) 現地調査より

2017 年 9 月に開催された「精神世界イベント」においてニューエイジに関する意識調査を行ったが、調査対象者全員がニューエイジについて知らないという結果が得られた³⁵。ここからも現在の精神世界の関係者でニューエイジを意識する者は少ないと考えることができる。

しかし、「精神世界はニューエイジと関わりがない」とするのは早計である。1990 年代の精神世界の雑誌には「米国ニューエイジ最新事情」、「ニューエイジアカデミズム」と題した特集が組まれており³⁶、この特集内容の記事には島菌が「(日本の精神世界に影響を与えた) ニューエイジ」と呼んでいるものと同じ内容が記されている。ここから推察すると、新霊性運動の概念が誤っていたのではなく、2000 年代に入ってから現在に至るまでの間にニューエイジという言葉の人々が意識しなくなったなど、精神世界側でのニューエイジの扱いが変わってしまったと考えられる。

7 ニューエイジという概念にとらわれない枠組みの再考

辞苑第 5 版』(岩波書店、1998 年)、『広辞苑第 6 版』(岩波書店、2008 年)、『広辞苑第 7 版』(岩波書店、2018 年)、『知恵蔵 2007』(朝日新聞社、2007 年)、『現代用語の基礎知識』(自由国民社、2017 年)、『世界宗教大事典』(平凡社、1991 年)、『宗教学辞典(2003 年版)』(2003 年、財団法人東京大学出版)、『現代世界宗教事典』(悠書館、2009 年)、『神秘オカルト小事典』(たま出版、1983 年)、『スピリチュアル用語辞典』(ナチュラルスピリット、2009 年)、『決定版 スピリチュアル用語事典』(主婦の友社、2011 年)、『精神世界の教科書』(アールズ出版、2012 年)。

35 ブース出展者らに質問をしたところ「ニューエイジとは自分達に何か関係はありますか」と逆に質問を受けた(現地調査「巡る月の祭典」2017 年 9 月 18 日)。

36 次を参照。高橋朋宏 鈴木七沖『精神世界が見えてくる』サンマーク出版、1999 年、132 頁~144 頁。石井慎二 編集 『別冊宝島⑩精神世界マップ』JICC 出版、1980 年、155 頁~185 頁。

そこで、現状を踏まえ図表 3 のとおり、先行研究で島菌が示した新霊性運動の概略図を使用し本稿で指す「精神世界」を規定することにした。

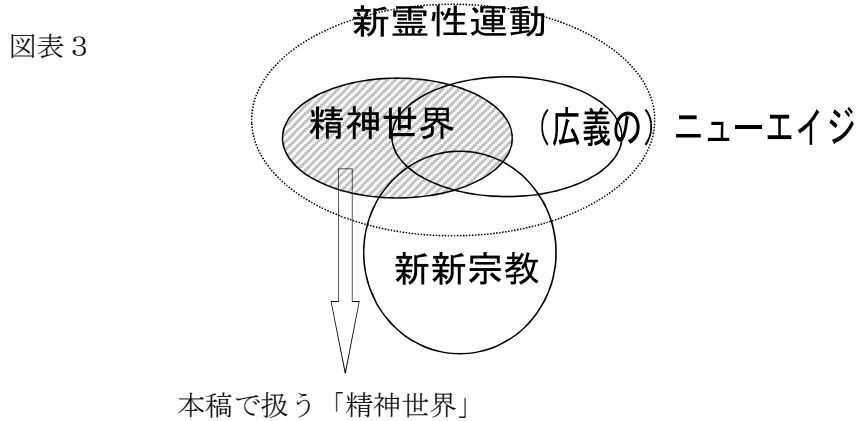
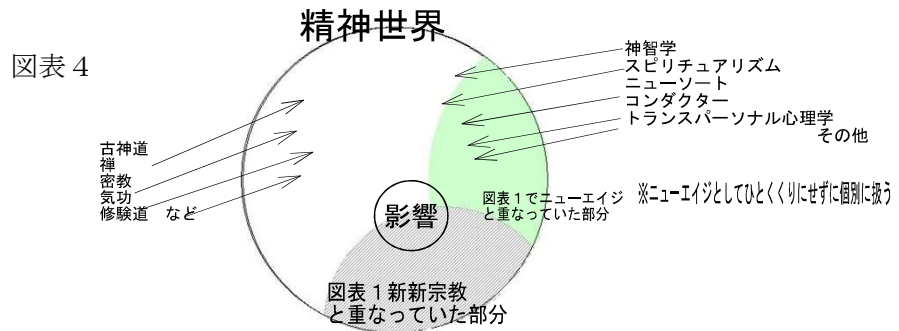


表 3 に示された「精神世界」について、整理すると図表 4 のようになる。



第 2 章 精神世界、宗教と霊性

1 霊性について

(1) 霊性の領域

「精神世界に関わる人々は宗教には不信を抱くが霊的なものに対しては好意的だ」と堀江は言う³⁷。教育現場においても「人間を超えた存在やその息吹への感動やそ

37 堀江宗正『スピリチュアリティのゆくえ』、160 頁~161 頁。

れに類するものに対する畏怖の念を教える」³⁸ようになってきているように、「靈性」は「精神世界」、「宗教」に関わらず大切にされている。

スピリチュアリティという言葉は、多様な使い方をされるため、本稿では「靈性」という訳語を使用することにする³⁹。

(2) 「靈性」と「宗教」

靈性はほぼ全ての人に共通した概念であり、「精神世界」、「宗教」の両者とも自己を超越した概念を認めている⁴⁰。安藤泰至は靈性と宗教の問題を下記の4つに分類している⁴¹。

- ① 宗教を含んだ、より広い概念として靈性を捉える。
- ② 宗教と靈性とは重なる部分があるがとりあえずは区別ができる。
- ③ 宗教の1つの本質的要素として靈性を捉える。
- ④ 宗教と靈性は別のものだと捉える。

(3) 靈性と精神世界

安藤の分類から靈性と宗教、そして精神世界を加えて考えると、次のような関係になる。

38 文部科学省では「大いなるものの息づかい」、「不思議な摂理」、「目に見えない神秘」、底知れぬ力に対して聞いたり感動したり可能性を追い求める強い力をかみしめ、宗教的情操をはぐくむ必要があるとし、『心のノート—小学校5・6年生』(2011年、72頁~75頁)を全公立小学校に配布している。

39 「日本的靈性」、「キリスト教的靈性」、「心理学的靈性」のどれを指すのかという点で使用方法が難しい(尾崎真奈美、奥健夫 編『スピリチュアリティとは何か』ナカニシヤ出版、2007年、19頁~43頁)のは同じだが、本稿においては「宗教」や「精神世界」の中にある超越的な息吹に対する畏怖の念や感動として使用する。

40 宗教ではないが「精神世界」でもサムシンググレート、ワンネス(宇宙意思・1つなるもの)やハイヤーセルフ(自己超越自我)、高級靈などの呼び方で自己を超越した靈的存在を認めている(松村潔『精神世界の教科書』。船井幸雄『すべては「必要、必然、最善」』ビジネス社、2014年。香山リカ『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』)。

41 安藤泰至「越境するスピリチュアリティ」『宗教研究』80巻2号、2006年、297頁。本稿ではスピリチュアリティと記載されている言葉を靈性に置き換えている。

- ① 宗教には成っていない部分の霊性から精神世界は構成されている。
- ② 宗教と重なる部分はあるものの、宗教ではないものから精神世界は構成されている（「宗教っぽい」が宗教ではない⁴²⁾）。
- ③ 宗教の中にあつた霊性の部分のみを抜き出し、精神世界は構成されている（宗教の外側ではなく本質部分を引き継いでいる⁴³⁾）。
- ④ 宗教とは全く関係なく精神世界は存在している。

2 「精神世界市場」の形成と接点のある宗教

上記の霊性、宗教、精神世界に対する論考として、日本における「精神世界市場の成立過程と同時期に成立した宗教」についての相関関係を図式化し、現在の精神世界と宗教についての再考察を行うために図表 5 (文末掲載)を作成した。

(1) 「精神世界市場」の形成について—図表 5 を作成するにあたり

精神世界という言葉が使用され始めたのは前述の通り 1970 年代だが、現在の精神世界の主流がブース出展型イベントであることから 1994 年の「船井オープンワールド」の開催をもって「精神世界市場」の概観ができあがったとする。

(2) 取り扱う人物や思想について—図表 5 を作成するにあたり

欧米で神智学やスピリチュアリズムなどの影響を受けた人物や思想は図表 5 に取り上げた他にも多く存在するが、ここでは日本の精神世界市場や、それと接点がある宗教に関連してくる人物や思想を中心に扱った。

(3) 本稿における宗教について

前述の通り精神世界を「ニューエイジ系宗教」⁴⁴⁾などの呼称で、広義の宗教とし

42 島藺進『精神世界のゆくえ』、4 頁。

43 堀江は、精神世界側からは、宗教の本質に霊性があり、その外側に教義や儀礼や教団などの制度化された側面があるので、霊性は宗教の本質ではあるものの形骸化された宗教とは異なる、と言われていることをあげている（堀江宗正『スピリチュアリティのゆくえ』、4 頁）。

44 島藺は 2012 年に「ニューエイジ系宗教」という呼称を用い「精神世界」を宗教の 1 つとして扱うことを試みている（島藺進「ニューエイジ系宗教」、山折哲雄 監修『宗教の事典』476 頁）。

て扱うこともあるが、本稿ではこれを広義の宗教としては扱わず儀礼や制度を有するものを「宗教」として扱う。また明治以降に成立した宗教の中でも、超常体験や個別体験を重要視する新しい宗教については既存宗教や旧来の新宗教と区別するために「新新宗教」と記載する⁴⁵。

(4) 精神世界と新新宗教

図表 5 では宗教関係者に色をつけた。ここからは「宗教と精神世界」は乖離しているどころか、密接な関係性を持っていることが分かる。精神世界において重要と思われる人物のうち半数以上が宗教の関係者なのである。

精神世界のパイオニアである船井幸雄が、自分に影響を与えた人物としてあげている高橋信次⁴⁶は新新宗教「GLA」の教祖である。しかしその高橋はニューソート思想や神智学の影響を受けている。

また新新宗教「真如苑」の教祖伊藤真乗も真言密教を基礎に据えつつ、浅野和三郎の心霊科学研究所に参加、浅野和三郎は新宗教「大本」で出口王仁三郎（教主の 1 人）の元で鎮魂帰神法を行ったり、神智学徒スティーブソンから神智学について学んでいる⁴⁷。日本古来の宗教と思想、西欧の様々な神秘思想、そして新新宗教は混じり合い、密接な関係を築いてきたのである。

特に新新宗教と精神世界には多くの接点があり、『精神世界から新新宗教へ』『新新宗教から精神世界へ』という道をたどった経験のある人はかなりの数いるだろう（島菌進『精神世界のゆくえ』、19 頁）とする島菌の見解は的を射ているように見える。図表で見る限り、新新宗教と精神世界との接点が浮き彫りになった形である。

第 3 章 精神世界と宗教の接点と隔たり

精神世界と新新宗教の隔たり

しかし現時点での調査結果からいえば、「精神世界から新新宗教へいく人」も「新新宗教から精神世界へ行く人」も確認できておらず⁴⁸、このような道をたどった人

45 新新宗教については島菌の 3 分類のうち「隔離型」、「個人参加型」は本稿で言う宗教として扱えないため、島菌の言う「中間型」をもって新新宗教とする。

46 船井幸雄『人は生まれ変わる』、108 頁。

47 川村邦光『憑依と近代のポリティクス』青弓社、2007 年、133 頁。

48 神智学、スピリチュアリズム、ニューソートなどの影響を受けており「精神世界に近い新新宗教」である GLA の中でも「精神世界」から入信した人については話を聞か

が相当数いるとは考えづらい。また精神世界関係者は救済宗教、新新宗教といった分類は認識しておらず⁴⁹、漠然と「宗教というもの」にネガティブなイメージを持っている。

精神世界、新新宗教ともに魂の7界層構造や、リインカーネーションという新しい転生観、ミーディアムの存在など多くの点において、ほぼ同じ思想や技法を内包しているが⁵⁰、両者は2007年の時点で島菌が予測した通りにはなっておらず、その関係には依然として隔たりがある。なぜこのような状況が起きているのかについて、精神世界と新新宗教、そして既存宗教の現状との関係から問題点を探っていきたい。

(1) 新新宗教との関係において

新新宗教の研鑽会に数回出席し、世話人から2代目教主が初期に書いた書籍を借りた⁵¹。その内容の半分近くは精神世界の基礎になっている神智学やニューソート思想だったが⁵²、研鑽会の世話人も他の信徒もそれについては知らなかった⁵³。教団本部ではこの点を把握しているようで、本部職員からは納得できる回答を得られたが⁵⁴、2世信者や若い頃からその教団で信仰生活を送ってきた者にとっては、教義がオリジナルなのかどうかに対する疑問よりも、教義をどう実践するかの方が大切であり、精神世界と教義や思想が同じかどうかは興味の対象外だと感じられた。

ない(2017年7月より11月までGLA近畿本部及び信徒研鑽会にて数度聞き取りを行った)。

49 「スピリチュアル批判について考える」と題した座談会にて、精神世界イベント主宰者を含む4人より聞き取り(2017年6月23日)。

50 一例をあげると真如苑では霊験を発する霊能者をミーディウムと呼び(秋庭裕「霊劇と霊能発動: 宗教法人真如苑における」『人間関係論集』18号、大阪女子大学人間関係学科、2001年、57頁~71頁)、精神世界におけるミーディウムも、それとほぼ同じ役割である(『Star People』vol.39、ナチュラルスピリット、2011年、50頁~60頁)。

51 高橋圭子『真・黙示録-地獄編』祥伝社、1977年。『真・創世記-天上編』祥伝社、1977年。『真・創世記-黙示編』祥伝社、1978年。

52 教主である高橋圭子の著作『真・創世記』にはアトランティス、レムリア、リーディングといった神智学や精神世界で使用される言葉が多数記載されている。また初代教祖である高橋信次の著作『心の発見-神の理編』(三宝出版、1971年)の中にはニューソート思想家であるジェイムズ・クレンションの著作と類似した内容が記されている(J. クレンショー『天と地を結ぶ電話-まさに来たらんとする世界の預言』谷口清超 訳、日本教文社、1955年)。

53 GLAの信者の研鑽会「生活実践」に度参加(2017年7月)。

54 GLA関西本部にて東京本部職員より回答(2017年12月10日)。

(2) 精神世界側の問題

これと同じことが精神世界側にも言える。これまでいくつかの精神世界イベントの参加者やパワースポットへの訪問者、また精神世界関係のセミナーやツアーの参加者、主宰者らより聞き取りを行った。しかし精神世界と新新宗教との関係について知っていたのは、真言宗の阿闍梨の資格を持った精神世界ツアーの主宰者だけであった⁵⁵。

さらに精神世界側に感じたことは、彼らが「どのようにして自分達の世界が形成されてきたか」についても知らないことである。精神世界イベントでの現地調査においても、彼らは神智学やスウェーデンボルグ、ニューソートといった精神世界の沿革を見ていく際に核となる人物や思想、団体についてだけではなく、精神世界のブース出展型イベントを創出した船井についても知らなかった。また占星術のブース出展者に聞き取りを行った際、彼らは占星術の精度を向上させるための研究に意欲的に取り組んでいたが、それ以上のことに興味を持つ余裕はない様子だった⁵⁶。この点では「教義成立の過程」よりも「教義の実践」に重きを置く新新宗教の信徒とスタンスは同じである。

(3) 精神世界と既存宗教

では、仏教、キリスト教などの「既存宗教」や比較的歴史のある「旧来の新宗教」と精神世界との関係をみてみる。精神世界側からはネガティブなイメージがあるとされているが（旧来の新宗教を含む）「既存宗教」側からのイメージは悪いとは言い切れない。

アメリカやヨーロッパではニューエイジと呼ばれた個々の思想や技法は、初めこそキリスト教と緊張関係にあり厳しい論争や批判を受けた⁵⁷。しかし現在は、キリスト教会の中にヒンドゥー教や中国宗教の靈性を論ずる講義が設けられたり、毎週ヨガを行う教会もある⁵⁸。またロンドンで由緒ある聖ジェームス教会では盛んにニューエイジ関連イベントの催し事が行われており、教会によっては内部にその事務局を設置するところもある⁵⁹。

このような例は決して欧米だけのものではない。現地調査例を示す。

55 大阪府吹田市「まんだらや関西」主宰者 Y より聞き取り (2016 年 2 月 6 日)。

56 「巡る月の祭典」占星術出展者より聞き取り (2017 年 9 月 18 日)。

57 島藪進『精神世界のゆくえ』、61 頁。

58 堀江宗正論、2010 年、10 頁~12 頁。

59 堀江宗政「日英米のスピリチュアリティ」：2009 年度の調査から (2)、『国際宗教研究所ニュースレター』、第 68 号、2010 年 10 月 25 日、8 頁~9 頁。

①既存宗教信者が精神世界に接触する場合

i キリスト教 信者 A の事例

愛知県在住で長老派のキリスト教会に所属している A (男性) は、カウンセリングの勉強をしていたが言語でのコミュニケーションに限界を感じ、タロット占いを学ぶようになった。その後、会社を辞めヒーリングサロンを開業しタロットで相手の心を開いた後にマッサージ等によって邪気を吸い取る施術をしている。キリスト教との関係を聞いたところ「キリスト教の神は真実な神であるが、人に直接的に働きかけることができない神なので補助的にスピリチュアルな技法が必要になる」とのことであった。

(聞き取り日 2016 年 10 月 4 日)

ii 創価学会 信者 B の事例

兵庫県在住で創価学会員の B (男性) は整体師を職業としていたが、整体治療に限界を感じ始めた時に「心癒術」というヒーリング技法を知り、これを取得。オーラを診断し相手の邪気を払う施術をすることによって、全体の治療効果があがるようになったという。

B は定期的に創価学会の会館に通っており、実母とともに熱心な学会員である。家に自分と母親用とは別に本尊を置こうとしたが「精神世界」の霊能者から「本尊が家に 2 つあるのは良くない」とアドバイスを受けて、それをやめるなど実生活におけるアドバイスは霊能者 (ヒーラー) の助言に従っている。B にとっては創価学会は自分の生活の場所であり、ヒーリングや霊能者は現実を生きるために必要な存在とのことだった。

(聞き取り日 2016 年 10 月 7 日 10 月 21 日)

iii 仏教 信者 C の事例

大阪府在住の C (女性) は浄土真宗大谷派の檀家で、父親は檀家総代をつとめていた。父親が亡くなってからは仏壇を引き取っている。結婚後、様々な問題が起きる中で一度「長男の霊」を名乗る生き霊から凶事の原因を知らされるが、その 1 回きりで霊との交信はできなくなってしまった。その後も問題が起き続ける中で先祖供養などを熱心に試してみたが効果はなく、その中でチャネリングという霊と交信できる精神世界の技法があることを知った。チャネラーを訪問した C はチャネリングの技法を取得し、霊能者を目指している。C はそれが浄土真宗の教えにないことは理解しているが「チャネリングは自分の能力開発、浄土真宗は自分の基盤となる宗教」だとしている。

(聞き取り日 2016 年 10 月 30 日)

iv カトリック関係者 D の事例

兵庫県在住の D(女性)はカトリック系のミッションスクールの高校で教師をしている。昔から靈感が強く、家は浄土真宗だった。キリスト教の雰囲気にあこがれ、洗礼は受けていないものの「自分はキリスト教徒である」という自覚があるという。しかし、交際した男性から精神世界について教えてもらってからは、過去世を尋ねたり、ヒーラーの認定講座を受けるなど、精神世界を利用しており現在も腕には数々のパワーストーンを着用している。「教えとしてのキリスト教は好きだが、実際に超自然的な力のあるような聖職者は 0.1%も居ない」と言い、宗教に直接的な問題解決能力は求めている。

(聞き取り日 2018 年 1 月 30 日)

②精神世界関係者が既存宗教に接触する場合

精神世界側から宗教に批判的な意見があることは確かだが、精神世界関係者がイベント前に神社に参拝する場合もあり⁶⁰、完全に宗教を否定している訳ではない。パワースポットへ行くと、この傾向はより顕著である⁶¹。

i 精神世界関係者 X の事例

作家志望だった X (女性) は、家庭を放置しての執筆活動に夫が愛想を尽かし、子供を連れて出て行った。小説を書く気力もなくした X が旅先で娘を思って描いたスケッチが友人には天使に見えたことを指摘されてから、以降天使の声が聞こえるようになった。これをきっかけに X は精神世界イベントに出展し相手の守護天使からのメッセージを絵にして渡すセッション⁶²を始めた。

しかし相手の守護天使からの言葉の受け止め方にムラを感じていた X は、精神世界の師匠にあたる男性から「正しいエネルギーの感じ方を学ぶために寺に修行へ行くように」と言われた。

天使と仏教とは無関係に思えるが、X の師匠は「天使も仏もエネルギーを発する

60 「精神世界イベント-べっぴん Life」準備会議後に参加者が近所の椿大神社に参拝するのに同行した(2016 年 3 月 30 日)。

61 一例として神社という宗教施設に「過去世の自分との出会い」や「エネルギー」などの「精神世界」的なものを求める人々が集まってきている(現地調査「晴明神社」2017 年 3 月 20 日、「恋愛べんてん」こと「氷室神社」2017 年 8 月 16 日)。

62 精神世界イベントの中で出展者が利用者にサービスを提供すること。多くのイベントでは「ワンセッション 30 分 4000 円」など、料金設定が書かれている。

のは同じ。本来の宗教は人間のエネルギーの根源に関する知恵や知識を持っているだけでなく、それをどのようにコントロールするかの方法も持っているもので、儀式の中にもその秘密を見いだせる」と勧められ、指定された天台宗の寺院に修行へ行った結果、何段階も高いエネルギーを使いこなすことができるようになったという。

(聞き取り日 2016年11月9日)

ii 精神世界関係者 Y の事例

大手旅行会社に勤務していた Y はツアーを利用する人の中に様々な心の闇があることに心を痛め「人間に本当に必要なのは心のサービスなのでは」と考え、「ヒーリング」、「レイキ」、「リーディング」など癒しに関するものを中心に「チャネリング」や「タロット」などの精神世界の技法を身につけた。精神世界マーケットの出展経験もある。Y はさらに多くの技法を学ぶが、そのうち「結果が同じであれば技法を使い分ける意味はあるのか」、「一体これだけの技法を学ぶ必要はあるのか」という疑問に突き当たった。そこで「何か核になるものが要だ」と感じ、高野山の某寺で修行をし阿闍梨の資格を得た後に下山している。

Y は「密教を核に据えることでこれまでバラバラだった精神世界の技法が体系化された」と言う。現在、精神世界ツアーの主宰者として海外まで飛び回っている Y は、時間があるときは精神世界の歴史や影響を与えた人物の研究も行っている。

(聞き取り日 2016年12月6日)

iii 精神世界市場ブース出展者 5 人の事例

金光教の桃谷教会、通称「願いの宮」へ現地調査に行った際、「開運スマイルフェス」という精神世界イベントのトラクトが置いてあった。そこには Z1 (感情ツボ療法)、Z2 (タロット 数秘術)、Z3 (エンジェルカードリーディング)、Z4 (カラーセラピー)、Z5 (こころに優しい布生理用品販売) の精神世界関係者 5 人の女性が載せられていた。

全員が桃谷教会の信者である。「金光教信者という名前が欲しかっただけでしょ」と同教会の「宮司」⁶³の桃山は笑っていたが、彼女らが精神世界イベント前後のお参りを欠かしたことはないという。直接彼女らから聞き取りは行っていないが精神世界イベントの前にお参りに行くということは特別なことではないようである。

(聞き取り日 2016年11月3日)

iv 精神世界市場共同企画者 6 人の事例

63 金光教に宮司という役職は存在しないが、「願いの宮」では通称として用いている。

精神世界でブース出展をしている女性や、既にセミナーを持っている女性など 6 人が自分達の技法を活かした女性のための個人プロデュース事業を立ち上げるために、ミーティングを行ったが、その成功を祈願するために全員が椿大神社の中の願いがかなうと言われている滝、「かなえ滝」へ出かけていき、参拝を行っていた。直接の聞き取りを行ったところ、「自分達は神さんに見守ってもらっているのだから、神さんに挨拶するのは当然」とのことであった。

(聞き取り日 2017 年 3 月 30 日)

このように見ていくと、相性が悪いと思われた「既存宗教」との方が親和性が強く、新新宗教との間よりも人の行き来の方が多いということが分かる。

(4) それぞれの特徴

なぜ前述のような現象が起きているのか、どうして本来多くの技法的接点があり思想体系も似ている新新宗教よりも既存宗教の方が精神世界と親和性があるのかを「精神世界」、「新新宗教」、「既存宗教」の立場から考えてみた。

①精神世界と新新宗教

これまで述べてきたことを総括すると、精神世界と新新宗教の相違点は制度化がなされているかどうかだけに思える。しかし礼拝・儀式制度の存在は 3 頁で島藪が示した「精神世界の人々がイメージする宗教」特有のものであり、新新宗教に入る者はそれらが必要だから（精神世界ではなく）新新宗教を選んでいる。逆に言えば精神世界関係者はそれらが不要と感じるから精神世界を選んだのであり、制度が整った新新宗教へ行くことはあり得ない。

確かに「多くの人々が既存宗教を離れていっている」ことは間違いないのだが、だからといって「精神世界関係者がネガティブなイメージを持っている宗教」は必ずしも既存宗教だとは言いきれず、この両者に乖離があると結論づけることは難しい。

②精神世界と既存宗教

現在歴史の長い新宗教を含め、既存宗教の中で超常的現象や能力を強調するものはほとんどない⁶⁴。既存宗教に属していても実際の問題に対する解決を求める者が「占い」、「タロット」、「チャネリング」などの精神世界の技法に頼ることは珍しいことではなく、既存宗教側もそれをあからさまに禁じてはいない⁶⁵。

64 キリスト教におけるカリスマ・ペンテコステ運動は例外的と言えるがこれについては本稿では触れない。

65 一例として大阪府内のキリスト教会では超常現象に悩む信徒に副牧師が霊媒師を紹介するなど 18 頁に記した内容と同様の現象が日本でも起きている（2006 年 7 月 25 日

逆に精神世界関係者が行き詰まったときに、宗教施設を精神集中の場にしたり⁶⁶、既に構築された教理を基にして自分の技法を体系化（理論化）するためにこれを利用することもある。既存宗教には直接的な力は求められないが、「構築された理論を学べる」という意味で精神世界側から価値を見いだされていると考えることができる。

③既存宗教は精神的安定を保証する

宮台真司は、「無縁死、超高齢者の所在不明、子供の虐待放置、自殺率の高さ」など、様々な社会的指標から日本において共同体が崩壊しており、人々の精神的な安定を保証する共同体の再建が必要だとした上で、現代において信仰共同体が重要な役割を果たす可能性は大きいと訴えている⁶⁷。人々は既存宗教には実際の問題に対する超常的な力は期待していないが、コミュニティーとしての既存宗教には期待しており、また「コミュニティーとしての既存宗教」が精神世界を忌避することもない。

④「日本の既存宗教」はもともと精神世界に近いものがある

精神世界を構成する中心の思想である神智学には、ヒンドゥー教や仏教の基本的な思想が多分に入っており⁶⁸、思想や技法面に禅、ヨガ、カルマ、解脱といった東洋的信仰要素が強く見られる⁶⁹。前述の通りキリスト教においてさえも精神世界は受け入れられており、もともと東洋思想の逆輸入版のような形で日本に入ってきた思想を基にしている精神世界と、日本の既存宗教に親和性があるのは当然とも言える。

(5) 精神世界、既存宗教、新新宗教とそれに関する人々

付け作成の資料を関係者より閲覧させてもらった)。

66 元スピリチュアルミュージック奏者の E は行き詰まったときにはカトリック教会へ出かけていき心を浄化すると新しいイメージが湧くという (2017 年 12 月 31 日聞き取り)。

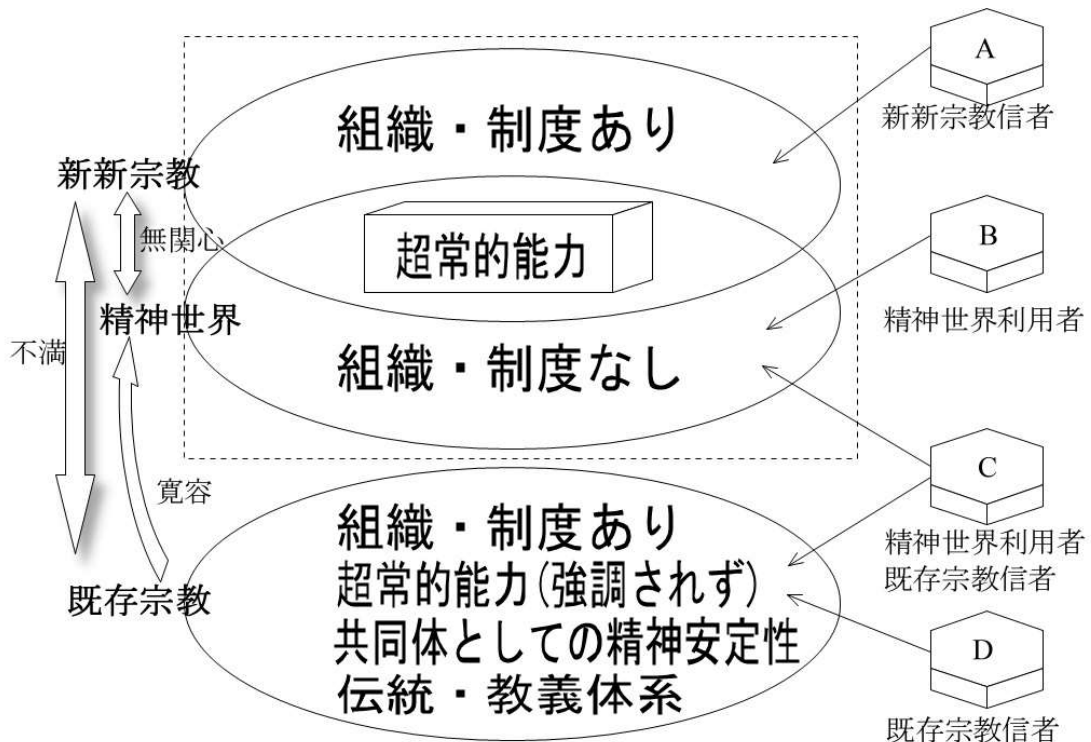
67 宮台真司「共同体が崩壊した日本にあって信仰に基づく連帯を持つ可能性—社会における宗教の役割・機能について」、WEB 第三文明・第三文明社の言論サイト、2013 年 6 月 26 日、閲覧日 2018 年 1 月 4 日、<http://www.d3b.jp/religion/359>。

68 クリストファー・パートリッジ 編著『現代世界宗教事典』井上順孝、井上まどか、富澤かな、宮坂清 (共訳)、445 頁~446 頁。

69 尾形守『ニューエイジムーブメントの危険』、27 頁。

これまで述べたことを踏まえ、それぞれの重なる部分、その中にいる人々について図表 6 にまとめた。

(図表 6)



A 新新宗教信者

超常的能力を求めている点では B と同じだが、組織（共同体）や制度を必要としている者。

B 精神世界利用者

超常的能力を求めている点では A と同じだが、組織や制度を必要とせず、地域コミュニティにも興味がない者。

C 精神世界利用者であり既存宗教信者。

i 超常的能力を求めている点では A、B と同じだが、親の代からの宗教や、コミュニティとしての宗教に価値を見だし既存宗教に軸足を置いている者。

ii 超常的能力を求めている点では A、B と同じだが、自分の能力開発のために既存宗教がもっている儀式や教義から何かを得ようとする者。

D 既存宗教信者

②精神世界、新新宗教、既存宗教という枠組みについて

同じ「」内にある「精神世界」と「新新宗教」の間では人の行き来はないが、特に批判し合うこともなくお互いに無関心だと考えられる。また精神世界に対して既存宗教は寛容である。しかし既存宗教と新新宗教は友好的な関係にあるとは言い難い。これは新新宗教が既存宗教を基礎にしており、仏教や神道を名乗ること⁷⁰に対する批判や、「伝統のない」宗教と⁷¹いう点で格下に見ているなどの理由が強いと考えられる。

第4章 超常的現象に対する対応を巡って

図表 6 から読み取れる精神世界と新新宗教の違いは「組織・制度の有無」であり、新新宗教と既存宗教の違いは「超常的能力を前面に出すか出さないか」、「伝統があるか無いか」ということになるのだが、本当にこのように割り切ってしまうて良いのだろうか。

1 超常的なものの扱いについて—精神世界での扱い

精神世界も宗教（成立当初の既存宗教を含む）もその根底にあるのは人間を超えた超常的な力や存在、自然科学では説明のつかない現象をどう扱うかという点である。

70 文 藤倉善郎、千吉良美樹 監修 島藺進『日本一過激な宗教学 1—日本の新宗教相関図』サイゾー編集部、2015 年。

71 島田は「日本の宗教は、世界の宗教と比べても、長い歴史を誇っている。（中略）若者たちは、そうした古くからの伝統にむしろ新しさを感じているのではないだろうか。」と伝統的既存宗教に興味を持つ若者が増えていることを述べ、新新宗教の勢いは衰退するだろうとしている（島田裕巳「平成の世の若者は宗教に何を求めているのか」2014 年 3 月 4 日、nippon.com、宗教から日本を読み解く、閲覧日 2018 年 1 月 4 日、<https://www.nippon.com/ja/in-depth/a02904/>）。

(1) 精神世界の抱える矛盾点

精神世界では超常現象とその原因もしくはその再現について、その扱いを個人の裁量に任せてきた。結果としてそこには組織や制度も生まれず、ただ「霊界の仕組み」、「魂の段階」などの世界観と「チャネリング」、「ヒーリング」といった技法のみが散見するようになってしまい、精神世界という 1 つの大枠の中で矛盾する世界観や技法を抱えることになった。

図表 4 で示した通り日本の精神世界は日本やアジアの伝統思想や技法と神智学、スピリチュアリズムといった欧米からの思想や技法、さらに新宗教のそれも包含している。しかしその個々の中にはその思想背景やそれに基づく技法が存在しており、精神世界の中に存在する互いの概念が対立してもおかしくない。2 つほど実例をあげてみる。

①スピリチュアリズムと神智学

死者の霊や上位霊との交信を主目的とするスピリチュアリズムと、魂の次元を上げて高次の自己（ハイヤーセルフ）と出会う努力をする神智学は一見似ている。しかし神智学側は、スピリチュアリズムも神智学も共通の源から出ているものの、スピリチュアリズムには高次の世界や存在を探求する方法がなく、感覚的世界を盲目的に歩き回っている（シュタイナーの演説より）と非難をしている⁷²。津城寛文はこの両者を「受動的」と「能動的」という言葉を使って説明している⁷³。

②リインカーネーションとニューソート

現在の精神世界市場の死生観の中心になるのがリインカーネーションという輪廻転生観である。これは仏教の輪廻転生とは違い、生まれ変わりを体験しながら魂のレベルを上げていくというものである⁷⁴。基本的には現世は前世で積み残したことをやり直す場所であり、転生（再生）を繰り返し罪を償い、進化を目指す。精神世界では「カルマ」や「浄化」といった言葉と一緒に使用されている。しかし一方、精神世界関係者には「強い肯定感」を持つ者も多い。これはニューソート運動⁷⁵の

72 津城寛文『〈霊〉の探求』春秋社、2005 年、197 頁～198 頁。

73 同上、195 頁。

74 リインカーネーションについては、アラン・カルディック著『霊の書（上）』（桑原啓善 訳、潮文社、2006 年）に基本概念が書かれている。

75 19 世紀末頃にアメリカでキリスト教から派生した異端運動で、心や思想の性向がその人の健康や経済状況に表出する思いは実現するという「過剰なポジティブシンキング運動」（川上恒夫『ビジネス書と日本人』Kindle 版、PHP 研究所、2012 年、238/2818）。

影響と考えられ（大正時代に福来が近い内容⁷⁶を提示しているが今回は取り上げない）、「悪いのは前世のあなたであって、今のあなたは悪くない」、「もっと自分を大切にあげましょう」というアドバイスをスピリチュアル・カウンセラーから受けることによって癒されることを望む利用者は多い⁷⁷。

しかしこの両者も矛盾している。リインカーネーションで転生（再生）を繰り返すのが前世から持ち越した罪を償い（カルマを浄化し）、レベルを上げることと、「悪いのは前世のあなただから、あなたは今のままで良い」とアドバイスするのは全く逆方向のアドバイスである。

「スピリチュアリズムと神智学」、「リインカーネーションとニューソート」という同じ精神世界の中で当たり前のように語られている思想の矛盾を 2 例示したが、このような矛盾は精神世界の中にいくつもある。「物質から解放されましょう」と言う反面、「思えば欲しいものは引き寄せられる」と言う人々が混在するのである。

（2）矛盾から精神世界の本質を考える

しかし矛盾点があるということこそが精神世界の構成要件の 1 つだと言える。精神世界のパイオニアである船井は「世界は『ワンネス（サムシンググレート・魂の本質）』によって創られ『波動の法則』で全て説明できる」とした⁷⁸。この波動という言葉ほど曖昧で不透明だが便利な言葉はない。「自分は悪くないという自己肯定で、自分の波動を整えることによって、自分が浄化されカルマが落ちる」と言われればなんとなくそのような気になる。

また「死者からの語りかけを待つのも、ハイヤーセルフと接触するために魂を磨いていくのも、その人の魂が決めることで、どこから昇っても結果は 1 つ（ワンネス）である」と言われれば、納得する者もいるだろう。

この 2 つ（ワンネス・波動）は、精神世界において、教義や制度のように細かく規定されていない。むしろ詳細が規定されない曖昧な説明だからこそ全てを「何となく」説明してしまう。

そのあやふやさや、曖昧さが必ずしも人に不快感を与えるかという点、そうとも限らない。制度や組織がなく、ゴールが設定されず、「今、ここに居る」心地よさ、「今、癒されている」心地よさ、「今、天使からのメッセージを受け取っている」心地よさを感じられる、今を生きていることに対する充足感といった利用者のニーズに十分応えているからである。利用者にとっては「癒された」ではなく「癒されて

76 福来友吉『心霊の現象』弘学館書店、1916 年、31 頁~38 頁。

77 香山リカ『スピリチュアルにハマる人ハマらない人』、113 頁~117 頁。

78 船井幸雄『未来への言霊』徳間書店、2014 年、61 頁~68 頁。

いる」ことが重要で、そのための手段はレイキ、ヒーリング、アロマ、リーディング、チャネリング、過去世体験のどれであっても良く、矛盾のない理論ではなくそれをも包み込む「曖昧な居心地の良さ」こそ精神世界の本質の 1 つなのではないだろうか。言い換えれば精神世界の曖昧さや無秩序さは社会において安全な「中間領域」⁷⁹として機能していると言うことができる。

(3) 精神世界の危険

①精神世界と商業主義

しかし現実の問題として精神世界に対する批判がなされていることも確かである。これらの批判には、行きすぎた商業主義、利己主義、排他主義、社会問題などが並べられている。

精神世界の中にある危険性に対しては櫻井義秀を初めとして多くの指摘がなされている⁸⁰。精神世界市場について櫻井は「(精神世界イベントの) 出展者の展示やそれに集まる人たちの楽しげな表情を見ている限りでは、大衆文化における霊性の興隆とそれが市場化されて洗練される可能性なども頭によぎる。しかし出展者や顧客たちの生活、将来展望などに一歩踏み込んで考えると、かなり寒々しい風景を筆者は想像してしまうのである」と述べている⁸¹。現地調査で精神世界イベント主宰者から話しを聞いた際にも、残念ながらそのような現状は存在しており「この業界に

79 心理学者のドナルド・ウッズ・ウィニコットが提唱した自分と母親の世界(内的世界)から第 3 者がいる世界(外的な世界)の間に出る途中の「移行期」を言い換えたもので「内的世界」、「中間領域」、「外的世界」という 3 層構造として使用される。ウィニコットによれば「移行期 (中間領域)」は外的世界へ子供が出るためにはまず自己しか知らない領域から、「自分ではない所有物(移行対象)」を持ち、そこから自発的に外に出る(移行する)ことを覚えていくための(外界と内界の中間的な)時期(領域)を指すが、同時に外的世界での激しいストレスを感じたときに緊急避難できる領域でもあり、社会学者のアンソニー・ギデンズはここに居る安心感を「存在論的安心」と表現した。職場にストレスがある OL がデスクにぬいぐるみを置いて癒されるというのもこの中間領域への避難行為の 1 つとされる。香山は精神世界を中間領域の 1 つとし、利用者を「中間領域への避難者」としており、精神世界の守護霊や天使の存在はデスクの上のぬいぐるみと同一視できるとしている(香山リカ『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』、萩原優騎「環境運動におけるアニミズムの一つの機能 —D.W. ウィニコットの移行対象論を主に参照して—」『社会科学ジャーナル』国際基督教大学、第 81 号、2016 年、36 頁~37 頁)。

80 櫻井義秀 編著『カルトとスピリチュアリティ』、第 6 章~7 章。

81 同上、270 頁。

希望をもって出展者として入ってきたのは良いが、どうしたら生活していけるのか分からず、気がついたら商業主義に走っているケースもある」という⁸²。

②精神世界出展者側からみた危険性

S (女性) は出展者目線から「自分が最初にセッションを受けた相手」、「自分の足が地に着いた経営努力」が重要だとしている⁸³。

精神世界は「癒される」場所であり、何らかの到達点を設定しないのが前提で、技法の提供側も本来はそれを分かっている筈である。しかし「楽しみに来る」のではなく、「深刻に問題を抱えた人が来る」ことも確かで、このような人を技法の提供者が自らの言いなりにしてしまうのは簡単なことだという。S は「利用者へはもう同じ問題をもって来るな、という姿勢が本来の出展者のあり方だ」と述べ、「利用者に本当は人生チョロいなと思ってもらえたら成功」とも言う。

しかし、深刻に人生に悩む人が、最初に出会った技法の提供者から「あなたの前世の業が深い」など故意的に問題を作り出された場合、利用者は不安をあおられ何度もセッションを受け、精神世界中毒になり、自らがセミナーを受け、気がつくとき精神世界市場の出展者側に回るケースも多い。この点は櫻井の指摘と同じである。S は「どんな形であれ出展者になった時点で自分は自営業者であることを自覚しないといけない」、「精神世界の中にある思想や技法は曖昧であやふやであっても良いが、一度出展をした以上はビジネスオーナーであり社会的に信用を得られないような商売をすべきではない」という。「社会なら当たり前のことを言っているだけ。精神世界は特別ではない。一般社会で靈感商法と思われるようなことをして、まともにセッションができる筈がない」という言葉が示すように、技法を取得して出展すればなんとかなるだろうと考える者が多いことが、質の低下や批判の増加に繋がっていると S は述べている。

③現象が型になるとき

技法を提供する側になった場合、たとえそれがどんなサービスを提供していたとしても、社会的に健全な商行為である必要がある。現地調査では深刻な状態にある利用者の存在を知ることができたが、イベント会場では深刻なトラブルに遭遇することはなかった⁸⁴。

82 精神世界イベント主宰者 M より聞き取り (2017 年 9 月 18 日)。

83 精神世界イベント関係者座談会終了後に聞き取り (2017 年 6 月 23 日)。

84 「マッチングフェア」(2016 年 11 月 8 日)、「癒しスタジアム in 大阪」(2017 年 2 月 5 日)、「巡る月の祭典」(2017 年 9 月 18 日)、「巡る月の祭典(2017 年 11 月 3 日)」、「癒しスタジアム in 神戸(2017 年 11 月 5 日)」、「癒しスタジアム in 大阪」(2017 年 12 月

しかしコンビニや書店に並ぶ精神世界の本を手にとると「魂を磨く」、「自分のレベルを上げる」「ライトワーク (使命) に目覚める」、「アセンション(地球の次元上昇)に乗り遅れるな」といった、自分が必死で努力して精神世界の中で成長しなければならぬような内容の本が多く置いてある。つまり一定の需要があるということである。

島菌は精神世界を「現象」と言い、新霊性運動という型ではなく大きな枠組みとしてこれを扱った。これまでに述べた通り精神世界はそこに矛盾があろうと、透明性がなかろうと「曖昧であり居心地の良さ」を持っていることこそが本質の1つであり「今、そこに、ある」現象であって、決して組織でも団体でもない。

しかし精神世界に一番手軽に触れる事ができる精神世界マーケットでは、どうしても市場の原理が働き、商業主義的な技法提供者は存在する。このような技法の提供者のセッションを受けた結果、「自分はこんな状態でいいのだろうか」、「自分の魂のレベルが低いからこんな悪いことが起こっているのではないか」、「自分は自己エネルギーを操作しきれていない」といった意識をもってしまい、自分で自分探しのルールを一本に限定してしまうことになる。

このことにより「曖昧で心地の良い居場所」である筈の精神世界は「個人的宗教」や「心理学的宗教運動」と呼ばれるような型になってしまう。

そこで人は魂のレベルを上げ、自分の使命をこなし、いつの日にかくるべきアセンションに取り残されないように備えをする必要性に迫られ、本屋に並ぶハウトゥー本を手にとるのである。

一度このような型に入り込んでしまうと、「スピリチュアル・アドバイザー」や「スピリチュアル・カウンセラー」と呼ばれる人々が示す内容に、疑問を持つことなく向かい始める。こうして本来は単に癒しや居心地の良さを求め、中間領域を楽しんでいた人々が社会的に批難される対象へと変わっていく。

彼らには技法指導者との縦の関係は存在しても、横の繋がりを形成することは不可能なのである。それゆえに彼らは排他的・利己的と言われるようになり、個人主義を脱することが出来ない。このような状態において彼らが、共同体を形成する宗教との接点を持つことは難しく、ここに宗教との乖離が発生するのである。

2 超常的なものの扱いについて—宗教での扱い

ここまで精神世界の超常的なものの扱いと、精神世界とは何かを考察してきた。では宗教はどのように対応してきたのだろうか。

17日)。

(1) 枠組みと制度化

多くの宗教において共通する点は、「1つの枠組み」として扱う思想や技法を収める体系を有しているか、新しく体系化するという点である。GLA は神智学、ニューソートなどの精神世界に通じる多くの影響を受けて出発している。初期の GLA の著作物を読むと、現在の GLA の活動との間に隔たりがあるようにも思える。しかし教団はそれまでの主張から上手く現在の教義へと繋がるように(新しく生み出された教義と矛盾しないように)、著書や講演会などを通じて、教団で扱う思想や技法について体系的に解説し、矛盾なく現在の教義につながるようにしている。

新しい思想や技法が出てきた場合、精神世界が現象としてそれをそのまま取り込むのに対して、宗教はそれを解釈、説明し、体系の中に組み込む能力を有しているといえる。

(2) 解釈者と解説を受ける共同体

精神世界でもその中の思想や技法について、解説をする者は存在している。しかし誰の説を支持するかは自由である。

これに対して、宗教では思想や技法についての解釈や使用については、教主や共同体の中で決める。

技法の使用者制限もこの一例である。使用できる者に制限をかけることによって、共同体が分裂しないように一定の予防策をとることができる。今回取り上げた GLA では教主の高橋圭子以外はチャネリングなどの霊能力の使用はできない。

GLA では、このような分裂への予防策をとりながらも、後継者問題については既に一定のプランを持っているようで、能力は教主に集中させているものの、万一の体制も整えているように思えた⁸⁵。

(3) 新しい現象に対する受け入れ体制

精神世界をみていると「ヒーリングブーム」が「お引き寄せブーム」に、そして「ヒプノセラピー」へと次々とブームが変わっていつている。新しい超常現象というものが発出する場合もあるが、これまでの精神世界の推移を見てきた限り呼び名や、技法内容が多少変わっても基本は同じものである。

精神世界では少しの違いであっても、それをそのまま「新しい技法」として取り込んでいく。これに対し宗教では、これまであった教義や制度を使いつつ、指導者や共同体で新しく解釈、説明、そして新たに体系の中に組み込んでいくという作業を経ることになる。

85 GLA 近畿本部にて総合本部職員より聞き取り (2017 年 12 月 10 日)。

もちろん、これが全ての宗教に通じることでないことも確かで、新しい思想や技法に対応できずにいる宗教の方が多い。このことは最初のページに書いた日本人の宗教離れの一因であり、伝統的宗教は知的思考を止めるという指摘にも現れている⁸⁶。

おわりに

1 一部の新新宗教の変化

今回あげた超常的能力を強調していた新新宗教の中では、徐々に共同体的な性質が強まり、信徒間での霊的現象を自制するように求めたり、より教義化が進んでいる傾向がみられる。

GLA では『新・祈り道』(2006 年)の刊行以降「生活実践路線」が強調され⁸⁷、「止観シート」、「煩惱地図」、「自我の解放」、「ウィズダム」といった、信者グループがそれぞれに取り組める実践的な研鑽がなされている。またプロジェクトと呼ばれる奉仕活動を通じて、それぞれの信者が教団の中で奉仕活動を行うなど、一見するだけでは、霊的な側面を確認することはできない。特別供養の時には教主の高橋圭子が死者のミーディアムとなって、供養に来た人々と死者を仲介するというスピリチュアリズム的な側面があるものの、この能力は教主に限定され、それを受け継いでいる者はいない⁸⁸。研鑽会でも霊的な現象には気を配っており、霊的現象があった場合は即座に本部に連絡するようにと指示されている⁸⁹。また GLA と同じく教勢を伸ばしている真如苑も一時期の教団批判を通し、2012 年には信者に IC カードを持たせ信者数を精査し、より信者の管理が進んでいる。また明瞭性から金融機関からの信用を得るなど社会的にも認められるようになってきていることも、霊能性から

86 島菌進「ニューエイジ系宗教」、山折哲雄 監修『宗教の事典』、476 頁。

87 GLA 研鑽会世話人より聞き取り(2017 年 11 月 20 日)。

88 宗教法人 GLA 近畿本部にて長期調査。高橋圭子本人の講演会及び地区本部講演会などに参加の他、GLA 職員からの聞き取り、会員向け雑誌『G.』を確認(2017 年 8 月~2018 年 2 月現在)。

89 GLA が「研鑽」の 1 つとするグループワーク「生活実践」の手引き書(レジュメ)には「霊的現象が生じた場合には、その方の魂と場をお守りするために、『生活実践』終了後、速やかに所属本部事務局に確認を行うようにしてください」と注意書きがしてある(2017 年度版)。

社会性重視への変化と捉えることもできる⁹⁰。

とはいうものの、新新宗教については現在調査不足であり、これをもって新新宗教の共同体的側面が強まってきているとは結論づけることはできない。今回は「少なくとも信者数が急激に伸びている 2 つの教団においてそのような傾向がみられている」という点にとどめておき、今後他教団に対しても積極的に調査を行っていく。

2 精神世界の変化

精神世界市場は、これまでに出てきている批判的な対象になるようなイベントがまだ主流ではあるが、「癒しを求めて来た人をさらに霊的に煽るような精神世界イベント」のあり方に疑問を投げかけ、精神世界に居る者が何をすべきかを考えるイベント主宰者らも出てきており⁹¹、精神世界側にも複数の潮流ができつつある⁹²。

3 精神世界と宗教の今後

このように見ると、これまで言われているように精神世界と既存宗教は、考えていたほどには乖離してはならず、むしろ似ていると言われている新新宗教と精神世界との間に距離を感じる結果となった。

あくまでも現時点での仮定であるが、新新宗教が超常的能力を前面に押し出さなくなり、既存宗教のようになることはあるかもしれない。しかし、(旧新宗教も含めた) 既存宗教も成立時には超常的能力が前面に押し出されていた⁹³。人が超常的な

90 真如苑は途中で転換期があり、その前後の変化も含めて現在研究途中である。別冊宝島編集部『日本の新宗教 50 完全パワーランキング—人脈力・資金力・政治力を全比較』宝島社、2017 年、12 頁。「蘇る宗教 真如苑の明暗③」『サンデー毎日』、155 頁~156 頁。

91 「お陽さまマルシェ&にじいろマーケット」、主宰者 K より聞き取り(2017 年 6 月 23 日)。

92 「巡る月の祭典」、主宰者 M は 2018 年 6 月にこれまでのブース出展型とは違う出来る限り商業主義から離れた精神世界イベントを企画中。(2017 年 12 月 15 日、メールにて)。

93 「金光教」、「天理教」、「黒住教」など明治前後に成立した新宗教はいずれも教祖の神がかりによって成立しており、病気なおしなどの超常的技法が前面に押し出されていた(山折哲雄 監修『世界宗教大事典』、684 頁、686 頁、1324 頁~1325 頁、569 頁)。

個人体験を求める限りは宗教側がどのように変化したとしても、超常的能力を前面に押し出した「新「新新宗教」宗教」が現れる可能性は否定できない⁹⁴。

海外では「心霊主義の起源」と言われたスウェーデンボルグ主義はもともとキリスト教神秘主義から出発し、「スピリチュアリズム」や「神智学」、その他の思想につながった。日本においても「メスメリズム」が変化し「催眠術」に、「スピリチュアリズム」は「こっくりさん」に、そして「千里眼」から「心霊研究」にと次々と似たような超常的概念が変化し、現在の精神世界を形成してきた。そして図表 5 に示した通り、これまで精神世界市場成立までには接点のある宗教が必ず存在してきた。つまり精神世界と宗教は乖離した側面があるように見えても、常に並行関係を保ち続けていくと考えられるのである。

4 精神世界研究を続けるにあたって

今回、現時点における精神世界の本質と宗教についてその一部を考察した。しかし結論を出すには不十分な点が多いのも確かである。精神世界の中で型に入るパターンとしてあげたものも、あくまでも今回扱ったのはマーケットを中心としたケースの一例で、別の道をたどった人々からも話しを聞いている。

既存宗教についても必ずしも今回のケースに当てはまらないものもある⁹⁵。「精神世界と並行して存在してきた宗教」に対する研究を掘り下げる必要性、研究対象である精神世界が短いスパンで変化しつづけることについて、常に現在の状況の確認をしていく必要性はあるが、これに振り回されると現象だけを追うことになってしまう。精神世界の研究をしていくにあたっては状況のみではなく、先行研究も踏まえつつ、そこからもう一段先に見つけられる新しいものを、常に意識して今後につなげていきたい。

94 一例だが精神世界では「モダンミステリースクール」という団体（現在は会社法人にしている）は精神世界についての学校の体を取りながら、代表者への帰依を求めたり恒例行事を「イニシエーション」と呼ぶなど、極めて宗教に近い団体に育ちつつある。

（団体公式 WEB ページ、閲覧日 2017 年 9 月 25 日、<http://mmsjapan.jp/>、同団体のイニシエーション WEB ページ、<http://www.aurora-healingsalon.com/menu/adept/>）。

95 一例をあげると、既存宗教のキリスト教でも、カリスマ・ペンテコステ派とオーソドックス教会は精神世界的な技法や儀礼祭祀を持っているにも関わらず、精神世界の技法及びその存在を容認していないが、今回は触れない。

(図表 1) 1995 年～2016 年までの主だった宗教の信者数 (単位: 人)

文部科学省『宗教年鑑』、平成 7 年版、平成 17 年版、平成 28 年版を元に作成。

(教団・教派)	1995年	2005年	2016年	2005年～2016年増減比
神社本庁	93,699,335	97,299,259	77,240,643	-20.62%
天台系仏教	2,718,934	3,491,564	2,843,007	-18.57%
真言系仏教	13,687,354	12,594,963	9,063,545	-28.04%
浄土系仏教	19,777,022	19,559,262	22,755,449	16.34%
禅系仏教	3,322,509	3,312,489	4,857,162	46.63%
日蓮宗	3,576,924	3,905,991	3,486,041	-10.75%
カトリック	435,823	448,531	443,721	-1.07%
オーソドックス	11,816	15,813	9,518	-39.81%
プロテスタント	527,408	546,929	514,827	-5.87%
大本	173,618	171,261	168,078	-1.86%
金光教	430,189	430,190	429,979	-0.05%
霊友会	3,072,780	1,605,241	1,295,497	-19.30%
立正佼成会	6,485,912	4,585,652	2,705,319	-41.00%
天理教	1,907,022	1,626,719	1,191,422	-26.76%
生長の家	877,110	802,721	496,121	-38.20%
世界救世教	835,756	835,756	609,722	-27.05%
PL教	1,215,266	1,063,889	895,571	-15.82%
(計)	152,754,778	152,296,230	129,005,622	-15.29%

(図表 5) 精神世界と関連宗教 相関図

図表は次頁。

なお、図表の見方は下記の通り。

①線上の記号

☆-当事者

◇-影響

○-参加

◎-設立

△-入信

▽-入信後退会

□-指導

-参考

=-分離

②枠の線種及び色分け

太字-日本に関連の深い精神世界関係者

太枠-精神世界関連団体

灰色太枠-精神世界関連思想

点線枠-精神世界関連事象

灰色背景黒文字-宗教関係者

灰色背景白文字-宗教団体

